

斎藤武生教授と言語文化学

横山幸三

— 1 —

斎藤武生教授は、平成11年3月31日をもって筑波大学をめでたく定年退官されることとなった。大学の定めとはいえ、教授とお別れしなければならぬのは同僚・後輩として誠に残念であり、また寂しい限りでもある。しかしながら、あえて「めでたく」と申し上げたのも、それなりの理由があつてのことである。ここでは、斎藤教授の定年退官に至るまでの足跡をたどることによって、その理由を明らかにしてみたい。

斎藤武生教授は、昭和34年に筑波大学の前身である東京教育大学文学部文学科英語学英米文学専攻を卒業後、ご郷里の埼玉県立高校の教諭となられた。この現場における5年間の貴重な英語教育の体験は、教授のその後における研究教育活動のバックボーンとなっているように思われる。昭和39年には、恩師の安井稔先生の勧めもあつて母校の大学院修士課程に入学、2年後に同課程を修了と同時に、安井先生が主任教授を務められていた東北大学文学部英文教室の助手に就任。翌年、静岡大学教養部講師に採用され、2年後には同大学の助教授に昇任している。筑波大学には、創設間もない昭和50年に助教授として着任した。この多難な草創期に、中堅・若手の代表としてその存在がいかに大きなものであったかは、その後における斎藤教授のお仕事ぶりからも十分に想像できる。昭和54年には、文部省在外研究員として米国マサチューセッツ工科大学言語学・哲学科へ派遣され、高名なチョムスキー教授のもとで最新の言語学を修められた。昭和60年に教授に昇任し、その後は学内の要職を歴任されていることは周知の通りである。すなわち、平成元年から2期4年間は人文学類長、平成7年から第一学群長、そして平成9年からは大学附属図書館長として、管理運営の中核で活躍してこられた。また、役職に伴う各種の学内委員としては、評議員・人事委員・財務委員等々を務められ、本学の充実と発展のために多大の貢献をされておられる。このように、定年退官される3月末までは、文字通り多忙を極めた日常生活が続くわけで、冒頭に「めでたく」と申し上げたのも、

これ以上斎藤教授にご迷惑をお掛けすることは同僚・後輩として忍びないからである。本学に着任以来今日まで勤め上げられた教授に対して感謝の意を表して、本号を退官記念の特集号として捧げる所以である。

— 2 —

斎藤武生教授は、東京教育大学の英文科で筆者よりも一回り上の先輩である。だから、以下、親しみを込めて斎藤さんと呼ばせていただくことにする。

斎藤さんと初めてお目にかかったのは、静岡大学の時代であったと思う。学部・大学院時代は、お互いにすれ違いでお会いしていない。大変に重厚なお方であるというのが、その時の第一印象であった。その後、筑波大学の開設時、英語関係の人事構成のなかに英語学の助教授候補としては、斎藤さんが予定されていることを知った。英文学の助教授候補として、たまたま筆者にも声がかかったが、都合によりその時には実現に至らなかった。もし一緒に着任していたら、あの創設期に苦労を共にできたであろうと思ひ、斎藤さんには誠に申し訳のない気持ちで一杯になる。丁度その頃、斎藤さんの書かれた「筑波の風」と題するエッセイを読んだ記憶がある。当時、世間の筑波大学に対する風当りは強烈で、巨人軍の江川投手の行動を批判した「エガワル」という言い方と並んで、何かにつけては「ツクバル」などと悪口を浴びせかけられたことを思い出す。そうした世間の冷たい風と、もうひとつ、冬期における「筑波嵐」とを重ね合わせて、新大学の置かれた厳しい状況を冷静に見つめつつ、だからこそ、この地で新しい学問の風を起さねばならないのだという趣旨の文章であったと思う。控え目ながらも、気概に満ちた一文で今でも鮮明に覚えている。

斎藤さんが、その後の研究活動のなかで、この新しい学風として「言語文化学」を提唱されたことは皆さんご承知の通りである。『言語文化学事始』(1983, 開拓社)がその結晶であり、言語と文化の境界領域を切り拓く新しい学問である。本誌にも「3の言語文化」(第2号, 1983), 「言語の生物学的基盤と文化的特質」(第3号, 1984) ほか先駆的な論文を寄せているし、「言語学と言語文化学——チョムスキーの言語観とそれが示唆するもの」(『言語文化の理論的・実践的研究』筑波大学, 1990)のように、新旧の学問の統合を目指す論文も発表し、言語文化学を定着させた。かように、斎藤さんの学問は新と旧・理論と実践の見事な均衡の上に成立しているように思われる。

斎藤さんは、一般外国語として英語を、専門科目としては英語学を、大学院では主として言語文化学を講じてこられた。こうした斎藤さんの幅広い学問体

系と優れた教育方法を今後どのような形で引き継いでいくのかは、我々に残された大きな課題でもある。

筑波大学での長年に亘るご指導・ご鞭撻に改めて感謝申し上げるとともに、今後のご健勝を心からお祈りして、結びの言葉としたい。